

## 教職実践演習の記録

### －「チームとしての学校」をテーマとして－

#### A Practical Report of "Seminar on Professional Practice in Teaching" :"School as a Team" as a Theme

堤孝晃（人文学部共通領域部）

Takaaki TSUTSUMI (Department of General Studies)

#### 1 はじめに

本報告は、本学での平成 29 年度「教職実践演習」での取り組みの一部を報告するものである。本報告に続けて、本授業を踏まえた 3 名の学生の「活動報告」が掲載されているので、参考としてほしい。

#### 2 本授業のねらい

『今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）』（中央教育審議会 2006）には、「教職実践演習」のねらいとして以下のように記載されている。

教職実践演習（仮称）は、教職課程の他の科目の履修や教職課程外での様々な活動を通じて学生が身に付けた資質能力が、教員として最小限必要な資質能力として有機的に統合され、形成されたかについて、課程認定大学が自らの養成する教員像や到達目標等に照らして最終的に確認するものである。学生はこの科目の履修を通じて、将来、教員になる上で、自己にとって何が課題であるのかを自覚し、必要に応じて不足している知識や技能等を補い、その定着を図ることにより、教職生活をより円滑にスタートできるようになることが期待される。

さらに、授業には以下の 4 つの事項を含めることが適当であるとされている。

- ①使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項
- ②社会性や対人関係能力に関する事項
- ③幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項
- ④教科・保育内容等の指導力に関する事項

これを受け、本学の平成 29 年度「教職実践演習」は、A：「教職課程・教育実習での学びの振り返り」、B：「学校見学実習を通じた自己の授業力の確認」、C：「『チーム学校』をテーマとした諸学校関係者による講話およびディスカッション」の大きく 3 つの取り組みを柱として実施した（注1）。本報告は、この 3 つの柱のうち、特に C についての概要と課題を簡単にまとめたものである。

ここで報告する C：「『チーム学校』をテーマとした諸学校関係者による講話およびディスカ

ッション」は、上記の授業内容に含めるべきとされる事項のうち、特に「③幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項」に対応している。その際、後述の通り、学校教育に関わる6名（のべ7名）の学外有識者をゲストスピーカーとして招聘した。これは、本来「教職実践演習」が、異なる専門性をもつ複数の教員が連携したり、教職経験者を含めた複数の教員の協力方式により実施したりすることが推奨されているためである（中央教育審議会 2006）。つまり、本学の教職実践演習は、堤が単独で担当する科目として開講されており、その限界を補うための措置である。またこれに加え、実際に学校教育現場にかかわる有識者と交流を行うことにより、「①使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項」や「②社会性や対人関係能力に関する事項」に対応する学習を進めることもねらいとしている。

### 3 内容

上記の3つの柱のうち、C：『チーム学校』をテーマとした諸学校関係者による講話およびディスカッション』として、全15回の授業のうち8回を充てた（注2）。各回の概要は、以下の通りである。なお、ここでのゲストスピーカーの講話（授業の半分程度の時間を充てることが多かった）は、本授業の担当教員である堤がインタビュー形式で語りを引き出す形式を採った。

#### ① 「チームとしての学校」の理念についてのディスカッション

6名（のべ7名）のゲストスピーカーを迎えるにあたり、文部科学省の掲げる「チームとしての学校」のありかたを再確認し、ゲストスピーカーとの有意義なディスカッションを行うための視点を整理するために、主に『チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について（答申）』（中央教育審議会 2015）を購読しディスカッションを行った。複雑化する現代の学校の現状や、多忙化する教員の労働実態を踏まえ、「チーム学校」の理念を確認すると同時に、その実現に向けた具体的な課題を多角的に整理する必要性を共有した。

#### ② 中学校教員（国語）

まず、「チームとしての学校」のもっとも中心的な役割を担う現役の中学校教員を迎え、主に学級担任の立場としての教育活動についてお話をうかがった。生徒の問題行動があった際の具体的な対応や、教師という仕事のやりがい、個々の生徒に対応することの難しさなどが語られた。そのなかでも特に議論が集中したのは、「親の養育能力」についてである。教員は、さまざまな生徒の問題行動の背景に「親の養育能力」不足を感じることが多いこと、教員以外の専門職には、教員の手が回りづらいそうした生徒や親の対応を求めることが多いことが確認された。

#### ③ スクールカウンセラー

次いで、スクールカウンセラーを迎えた。心理職と教員との間の専門性の違いや、スクールカウンセラーに与えられたリソースの少なさが確認され、「連携」の難しさを具体的な仮想事例を使ってディスカッションした。そこでは、生徒一人ひとりを「個人」として受け止めることを重視する心理職の立場から、生徒たちを「集団」として扱わざるをえない教員の固定された規範意識や、学校組織のあり方が批判的に検討されることになった。より良い「連携」を行うための制度の整備と、両者の相互理解促進の必要性が確認された。

#### ④ 元PTA会長

PTA会長の経験者を迎え、親として、元PTA会長としての2つの立場からのお話をうかがった。PTAにかかわってきた経験から、多忙さや無限定性などの教員という仕事の難しさへ理解を示し、実際の教員の高い献身性を評価しつつも、自分の子どもを強く愛する親という立場と、その子どもたちを集団として扱わざるをえない教員との間に生じる葛藤が示された。またPTA

会長としてもっとも問題視するのは、学校組織の硬直性についてであった。

#### ⑤ 児童福祉司

児童相談所や養護施設、福祉事務所など、主に児童福祉分野での職務経験を持つ児童福祉司を迎え、お話をうかがった。日々多くの重大なケースを抱え、個別の丁寧な対応に追われる福祉職は、子どもの最低限の「心身の健康」を保障し、「命を救う」ことを第一に重視する。これに対し教員は、集団としての生徒として接することが多く、何より子どもたちの「成長」を価値基準として対応しようとする。この両者の違いによって生じる葛藤が語られた。また、通告をめぐる考え方の違いなど、教員の福祉制度に対する理解の必要性にも議論が集まった。

#### ⑥ 塾講師・経営者

講師として授業も受け持つ塾経営者を招いた。塾は、「チームとしての学校」のアクターとして、これまでほとんど注目されていない。それにもかかわらず、本授業に塾講師を招いたのは、土曜授業や補習授業、長期休暇中の特別授業など、主に学力向上のための外部リソースとして地域の私塾との「連携」が模索されているためである（黒石・高橋 2009; 全国私塾情報センター 2013 など）。また、塾という私教育にかかわる立場からの意見は、学校教育の公共性を捉え直すために有効であると考えられる。

塾講師の立場からは、生徒の多さや職務の広さなどの学校教員が抱える多くの難しさや、生徒が抱えるさまざまな事情を問わず、すべての生徒を教育しなければならない困難に敬意が示された。また、そうした性質の違いから、学校が塾を嫌厭しがちであることにも理解が示された。その上で、学力保障を求める家庭の強いニーズに応えることには公共的にも大きな意義があること、また学校の教員の間には授業力に大きな格差があり、必ずしもそのニーズに答えられていないことなどが意見された。また、学力向上が重要視されるようになっている現在の学校の変化は「学校の塾化」といえ、同時に、塾が必ずしも成績向上だけを目標としないようになる「塾の学校化」が一部生じつつあることが指摘された。

#### ⑦ スクールソーシャルワーカー

教員経験もあるスクールソーシャルワーカー（SSW）を招き、教育・心理・福祉などの多角的な視点から子どもたちの状況を捉える必要性と、その難しさについて議論された。SSWの制度的・法的根拠や勤務実態、具体的に遭遇する問題などが紹介された上で、具体的な仮想ケースを用いてアセスメントの訓練も行った。正確なアセスメントを行うためには、一見些細にも思える数多くの情報が必要であり、全体の構造を俯瞰しながら詳細な情報を整理・再構築する力が必要であることが示された。

#### ⑧ 元教員

ここで招いた元教員は、先に招いたSSWと同一人物である。⑦で行ったSSWとしての授業内容を踏まえた上で、学級担任としての指導のあり方について再度ディスカッションが行われた。教員という立場からだけでは見えづらい、想像を超える困難を抱える家庭があることを理解するとともに、具体的な模擬ケースを使ったアセスメントと、教員として指導するロールプレイを行った。学生は学級担任として個別の生徒に対応することの難しさを体感し、教員自身が視野を大きく広げる努力を行うとともに、他職種との相互理解のもとに連携を進めることの重要性が議論された。

### 4 成果と課題

6名（のべ7名）のゲストスピーカーを招き、実際の教育現場にかかわる異なる立場のアクターの体験や考えを直接聞き、ディスカッションを行うことができた。本授業で扱った事柄の

概要は、学生がこれまでの授業で学んできた内容の確認でもあったが、学生たちは「教員」の立場からのみ理解する傾向が強かったようである。しかし、さまざまな立場のアクターと実際に対話することで、教育実習では見えない現場の難しさを知り、また異なる立場から語られる論理の葛藤の折り合いのつかなさを体感したといえる。これは、教員という役割を反省的に捉え、今後に向けた多くの課題を理解する機会を得たと言えるだろう。

しかし、後掲のレポートを読む限り課題もある。最も大きな課題は、ゲストスピーカーに教員以外の関係者が多かったためか、学校教員を批判的捉えすぎている可能性が高いことである。「チームとしての学校」へ向けて、大きな改革を前進させていく中心的な役割を担うのは学校教員であることは間違いない。したがって、学生たちが教員としての課題が整理できたという意味では大きな収穫である。しかし、現状の機能不全は、個々の教員の単純な努力不足ではなく、歴史的に作り上げられてきた学校制度の構造的な要因によるところが大きい。その点への配慮が抜け落ち、反動的に教員という立場に対する無理解と批判へとつながってしまっているとすれば、視点が反転しただけで視野の狭さは変わりがないことになるだろう。SSWの授業回で示された、「全体の構造を俯瞰しながら情報を整理・再構築する」ことを実践しつつ、教員としての実践を洗練させる必要がある。それゆえ、課題を意識しつつも、「連携」の具体的なありかたをじゅうぶんに引き出すことができなかつたのではないかと思われる。個別のフォローを行うとともに、次回以降は各回の内容を反省する時間的余裕をもち、より体系的な内容へと洗練させることが求められる。

#### 注)

- 1) 授業のシラバスは、本報告の最後に添付している。日程の調整の結果、一部の内容や順番が変更されている箇所がある点に注意されたい。
- 2) これに加え、全体の内容を総括し議論する授業回を持っているため、実質的には9回をCの内容に充てていることになる。

#### 参考文献

- ・中央教育審議会，2006，『今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）』。
- ・中央教育審議会，2015，『チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について（答申）』。
- ・黒石憲洋・高橋誠，2009，「学校教育と塾産業の連携についての一研究：現状の分析と今後の展望」『教育総合研究：日本教育大学院大学紀要』2, 1-14.
- ・全国私塾情報センター，2013，「文部科学省、『土曜授業』で学校と学習塾の連携を後押し」『月刊 私塾界』2013年10月22日 (<http://www.shijyukukai.jp/2013/10/1831> : 2018/03/10 最終確認)

#### 要旨

本学における教職実践のうち、「チームとしての学校」をテーマに外部講師をゲストスピーカーとして招聘した内容の記録である。学校のあり方を多角的に検討することができた一方、構造的な問題を捉えることができなかつたという課題が残るものとなった。

#### キーワード

教職実践演習、チームとしての学校

シラバス（一部抜粋／実際の内容とは一部変更あり）

ディプロマ・ポリシーと授業の目的	<p>《当該科目のディプロマ・ポリシー》</p> <p>社会人基礎力を備えた職業人になるために必要な教養及び就業力を身につけていること</p> <p>このディプロマ・ポリシーを達成するため、本授業では、教職課程の最後の総まとめとして、教員として必要とされる諸技能が修得できているかを確認するとともに、自身に不足している知識・技能を補うことを目的とする。</p>
到達目標	<p>本授業の最終的な到達目標は、教育および学校現場の課題を深く理解するとともに、今日特に求められている実践的指導力の向上を目指し、教員としての高い使命を自覚しつつ常に学び続ける姿勢を確立することにある。そのために、大きく以下の4点の到達目標を設定する。</p> <p>① 学校教員として求められる使命や責任を確認する</p> <p>② 学校教員として務めるための社会性や基本的なマナーなどを確認する</p> <p>③ 生徒を理解する学級担任として、またチームとしての学校の一員として、役割や専門性を確認する</p> <p>④ 教科指導のための基本的技術が修得できているかを確認する</p>
授業の内容	<p>受講生同士の協議、学校にかかわる諸アクターとの交流、教育に関する調査発表等を取り入れ、体験的で実践的な内容とする。まず、教職課程履修で培った力量と自己の課題を明確にする。次に、学校見学や現場教員の講話を通して、学校の実態及び現職教員の職務内容、課題などを把握する。その上で、保護者・心理職・福祉職など教員以外の関係者の講話やロールプレイを通して、連携のあり方と教師の専門性を確認してほしい。これらを総合することで、最終的に学級経営計画を作成し模擬授業を行う。</p>
授業計画表	
回	内容
第1回	<p>オリエンテーション——授業の進め方と、これまでの自身の履修状況の確認</p> <p>【予習】これまでの履修状況の記録を振り返り、反省点をまとめておく（90分）</p>
第2回	<p>教師に求められる資質・能力の確認と教育実習の振り返り——履修者による共有</p> <p>【予習】教師に求められる資質・能力に関する各種答申や資料に目を通し要点をまとめておく（60分）／教育実習の記録をもとに反省点をまとめておく（30分）</p> <p>【復習】本授業および卒業までに達成すべき具体的な目標をワークシートに記入しておく（60分）</p>
第3回	<p>教育の実態についての理解——1年間の教育時事の収集と発表</p> <p>【予習】一年間の教育時事を振り返り、発表資料を作成する（90分）</p> <p>【復習】授業内容をまとめてワークシートに記入しておく（20分）</p>
第4回	<p>学校見学の事前指導——映像教材を用いた学習</p> <p>【予習】授業方法についての資料を整理し、自身の課題を整理しておく（60分）</p> <p>【復習】授業内でのノートを整理しておく（20分）</p>
第5回	<p>学校見学</p> <p>【予習】学校見学のための準備を進めておく（90分）</p> <p>【復習】記入した見学ノートを整理し、内容をまとめておく（90分）</p>
第6回	<p>学校見学の振り返りと課題の共有</p> <p>【予習】見学ノートをもとに、ワークシートに考察をまとめておく（120分）</p> <p>【復習】授業方法についての学習内容をまとめておく（30分）</p>
第7回	<p>「チームとしての学校」が求められる現状と課題の確認</p> <p>【予習】「チームとしての学校」に関する答申や資料に目を通し、その要点をまとめておく（60分）</p> <p>【復習】授業内容をまとめて自身の疑問点を整地しておく（40分）</p>
第8回	<p>学校組織における教師の役割と課題——現場教員を迎えての講話</p> <p>【予習】これまでの内容を踏まえ、ゲスト講師への質問を整理しておく（30分）</p> <p>【復習】授業内容をまとめ、レポートを作成する（60分）</p>
第9回	<p>保護者・地域との関係づくり——PTA関係の保護者を迎えての講話</p> <p>【予習】これまでの内容を踏まえ、ゲスト講師への質問を整理しておく（30分）</p> <p>【復習】授業内容をまとめ、レポートを作成する（60分）</p>
第10回	<p>心理職との連携——スクール・カウンセラーを招いての講話</p> <p>【予習】これまでの内容を踏まえ、ゲスト講師への質問を整理しておく（30分）</p> <p>【復習】授業内容をまとめ、レポートを作成する（60分）</p>
第11回	<p>学校外施設との連携——児童養護施設職員を招いての講話</p> <p>【予習】これまでの内容を踏まえ、ゲスト講師への質問を整理しておく（30分）</p> <p>【復習】授業内容をまとめ、レポートを作成する（60分）</p>
第12回	<p>諸アクターとの連携と教師に求められる役割——スクールソーシャルワーカーを招いての講話</p> <p>【予習】これまでの内容を踏まえ、ゲスト講師への質問を整理しておく（30分）</p> <p>【復習】授業内容をまとめ、レポートを作成する（60分）</p>
第13回	<p>学年・学級経営の方法と実践——現場教員を招いてのロールプレイ</p> <p>【予習】これまでの内容を踏まえ、ゲスト講師への質問を整理しておく（30分）</p> <p>【復習】授業内容をまとめ、レポートを作成する（60分）</p>
第14回	<p>学級経営計画の検討と模擬授業</p> <p>【予習】学級経営計画を作成するとともに、模擬授業を準備する（30分）</p> <p>【復習】授業を踏まえた反省点をまとめておく（60分）</p>
第15回	<p>全体の振り返り／シェアリング</p> <p>【予習】レポートの下案を作成する（180分）</p> <p>【復習】レポートの修正（60分）</p>